寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号（〒807-1261）
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

筑前六宿開通四〇〇年記念

第20回 宿場まつり

もう一度こやのせ

やっぱー宿場踊りバイ！

今年の宿場まつりは、第20回と筑前六宿開通四〇〇年の記念の年です。日時は、例年通り十一月の第一日曜日の十一月四日午前十時から午後四時までです。

おいでなっせー。総踊りに！

その記念の年にあたり、実行委員会を例年より一か月早く七月二十七日に立ち上げました。

実行委員会では、一回目も二回目も、これから先の「宿場まつり」のあり方について侃々諤々（かんかんがくがく）の論議が行われました。

沢山の意見が交わされましたが、思いは一つ《**「宿場をどり」の総踊りを昔のような輪にしたい**》でした。そのためには、まつりそのものの工夫改善と町内の皆さまのご協力が必要です。ぜひ、総踊りの輪に加わってください。宿場をどりの浴衣（ゆかた）をお持ちの方は、もう一度タンスから出しましょう。

催し物の配置を工夫

人の流れを考えて催し物の配置を改善し、まつりの雰囲気が町全体へ広がるようにしました。

催し物は、例年と変わりありませんが、青空市場には「筑前六宿のコーナー」が新たに加わり、まつりの盛り上げに一役買っていただきます。

節目の今年の宿場まつりが、最高に盛り上がりますよう、皆さんのご支援ご協力をお願いします。

わっしょい百万夏まつりに初参加した木屋瀬山笠　木屋瀬山笠、小倉に見参！

「わっしょい百万夏まつりに山を出そう。」

事の始まりは青年会のその一言でした。氏子総代会の集まりで初めてその話が出た時の反応は「出場なんて…」とか「そんなの無理やろう」というのが大半でした。

無理もありません。それまで誰も考えすらしなかったため、話があまりに突飛すぎてまるで夢物語、現実味のない絵空事としか思えなかったのです。しかし話が進むにつれて皆の足並みは驚くほどスムーズに揃いました。

夢の大舞台へ。

それは確かに絵空事でしたが誰もが憧れていた舞台だったのです。

また。何と言っても一番の功労者は山笠製作にたずさわった人たちではないでしょうか。毎日、小倉の作業場まで通い夜遅くまで作業を続け、一番辛かったと思います。お陰様で他の山笠に負けない立派な山笠が完成し、皆誇りに感じています。誰もがそれぞれに課せられた責務に追われて大変でしたが、みんなどこか嬉しそうでキラキラ輝いていました。

わっしょい百万祭り当日はもの凄く暑く、小倉の街は人で溢れていました。

競演中周りを見渡すと戸畑の提灯山笠や若松の五平太ばやし、黒崎祇園の山笠と北九州の色々な地域の山に囲まれていて、興奮しました。まさに夢の大舞台。こんな経験めったにありません。

何より嬉しかったのは競演中や競演終了後、北九州の山のぼせたちと話せた事。色んな地域の山のぼせたちとおらが山自慢の話をするのは本当に楽しかったです。本当に貴重な体験でした。

わっしょい百万夏まつりで木屋瀬の山笠を見た方々から「どこに行けば見れるのか?」という問い合わせも受けました。わっしょい百万夏まつりに参加した事で木屋瀬山笠、木屋瀬をこれまで以上に多くの方々に知ってもらういい機会になったと思います。

最後にわっしょい百万夏まつり参加にあたりたくさんの寄付を頂きました。皆様の寄付がなければ参加する事は出来ませんでした。皆様の寄付があったからこそ参加出来たのです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

（八尋弘文）

※尚この模様を収めたDVDと写真データを千円で販売しておりますので、ご希望の方は木屋瀬記念館までお問い合わせ下さい。
（問い合わせ先）
電話　093－619－1149
（担当）
長崎街道木屋瀬宿記念館事務局

第48回 企画展

城郭展

～今よみがえる名城～

平成24年11月1日㈭より

第48回企画展は、平成24年11月1日㈭から「城郭展～今よみがえる名城～」を予定しております。筑前城郭研究会の皆さまのご協力のもと、黒崎城はじめ筑前各地区の城郭を細部まで再現したジオラマや、それぞれに関する資料の展示を予定しております。

シリーズ 筑前木屋瀬宿 神仏めぐり

第二十六回 大儀山 永源寺

木屋瀬宿本陣門（お茶屋門）

木屋瀬記念館の裏を流れる遠賀川の堤防に木屋瀬の町を象徴するような大銀杏が二本立っています。この銀杏は川舟が遠賀川を往き来した頃の船着場の目印でもありました。その銀杏の木の真下にあるお寺が、曹洞宗大儀山永源寺です。

正門から石垣に沿って左に行くと、どっしりした黒塗りの横門があります。この門は木屋瀬の宿場時代の貴重な遺構である本陣門（お茶屋門）であります。この本陣門は紆余曲折を経ながら、現在永源寺の横門として平成の御世まで凛としてこの地に建っています。武士の館の門らしく剛毅朴訥とでもいうか、黒塗りの大きな柱を組み合わせた簡素な作りで、軒に黒田家の家紋藤巴入りの瓦を載せ、威厳のある風格で私達を圧倒するような雰囲気があります。横には、今では大変珍しくなった手繰りポンプの井戸があります。

黒田家家紋入りの瓦

福岡藩では、長崎街道沿いの筑前六宿の本陣は、「お茶屋」と呼ばれ、藩主の領内巡回や狩猟の為の別邸でありましたが、参勤交代の諸大名や幕府高級役人、公家、勅使等の宿舎ともなっていました。建物の管理は代官でありましたが、接待は町茶屋主人「お茶屋頭」が当っていました。

木屋瀬の本陣は、現在の長崎街道みちの史料館から、数住病院の手前辺りまでの広さがあり、平成十年の発掘調査では、本陣造成は十七世紀前半であることが判明しています。江戸時代に本町に住まわれていたという、千々和勝蔵さんの話では、「本陣は六尺位ある白壁を巡らせ、大きな門やら小さな門など七つ位あった、本陣の横に脇本陣があり本陣との境に大きな銀杏の木があった」と語られています。

この本陣門から、大名やその姫君達が出入りされたと思うと感慨深いものがあります。この門は、本陣制度廃止に伴ない、明治三年（1870）に、永源寺の山門として移設されましたが、大正十二年（1923）永源寺山門の新設に伴い横門としてこの場所に移設されたのです。その後台風等で破損が著しく昭和六十一年に屋根瓦など葺き替え等をして修復しました、その折、宿場時代の黒田家の家紋「藤巴」入りの瓦は史料館に保管されるようになりました。

本陣門（現在の横門）

江戸時代の宿場の本陣門は、全国的にも数が少なく、長崎街道筑前木屋瀬宿の本陣門は貴重な宿場の遺構として末永く保存したいものです。

秋深しあかずの扉本陣門

（本町　野口靖彦）

伝統の盆踊り みんなで賑やかに

今年もお盆に賑やかに踊られました。天気が心配されましたが何とか無事に踊る事が出来ました。毎年同じようにこやのせ座にて参加者全員で踊り、その後新町側、本町側に分かれて各々の初盆家へと向かい、心を込めて踊ります。

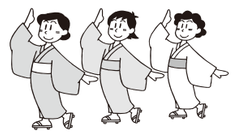
初盆のお宅では、お茶やジュース、ビール等を用意していただき踊り終わった後、接待していただきありがとうございました。

今年は少々初盆が多く夜も遅くまで踊りましたが、子供達も頑張って一生懸命最後まで踊ってくれました。一日の終わりには、みんなにお菓子等を配ると、大変喜んでいただきました。

また、青年会等若手が多く参加して頂いたので、踊りも大変盛り上がり、移動もスムースでした。皆さん来年も賑やかに踊りましょうね。

最後に事前の準備等ご苦労された関係者の方々に深く感謝申し上げます。

（K・Y）



挑戦！ 今年の年越し蕎麦は手打ちで！

○日　時：平成24年12月28日㈮
10時～15時

○参加費：1200円
（材料費。7人分持ち帰れます）
※追加1000円で別途7人分持ち帰れます

○人　数：30名（予約制）
※蕎麦打ち名人に保存法・調理法ほかも指導していただきます。

○申込先：北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館事務局
TEL 093－619－1149

■ 年越し蕎麦の販売もしております。

わたしの昔話

【柴田豊廣遺稿集】より

木屋瀬天神河童

宮田町と鞍手町を結ぶ山道長谷観音越えがあり、峠に河童村入口と書いたバス停がある。ここに降りると河童をデザインした民芸窯があり、河童の陶像や河童村の由来を書いた高札も立ててある。その昔、九千坊山河童と海女御前河童が戦い山河童が勝った。その祝賀に角力大会を開いた。優勝した銅若坊は幼名川太郎であったのでその後、河童川太郎と有名になった、と。

木屋瀬河童の話は川舟船頭さん達の身振り手振りの熱演で、面白い事や恐いこと等をよく聞いていた。久保崎天神の森から寿命の唐戸までの堤防は、竹や雑木が追い茂り川岸に覆いかぶさり、流水は深い淵になっていたので大人も寄り付かない危険な所であった。但しここを遠賀川水系の河童の総元締木屋瀬天神河童一族がその本拠としていた。そしてここより英彦山川や嘉麻川犬鳴川と分身を派遣していたと聞く。河童川太郎もここより隠谷の河童村に登ったのであろう。

川遊びの楽しさに夢中になっている子供達を水難より守るために、久保崎の天神様と感田町の庚申様はいつも水面を見張っておられるので、この二つの神社の間には河童は一歩もはいれないので、この間は安全だからここで水遊びをしなさいよ、と何度も注意されていた。万一天神様より下へ下へ流されると待ち構えた河童に捕らえられるよ、河童は捕えた子供を一度に水より上に高々とさし上げ子供の笑い所をチクチクさわる、子供はたまらずカラカラと大笑いする。これを最後に子供は水中に引き込まれる。河童は子供の尻の穴より手を差し込み肝を取る、肝を取られた子供は死ぬのだよね、と怖い話もあった。

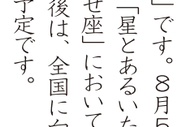
今にして思えば子供の頃、遠賀川での水難事故が起きた事は何度か覚えているが、それが河童のせいだと聞いたことはない。むしろ河童一族は、庚申下の広大な砂浜で木屋瀬の子供達と角力大会を開きたいなと思っていたかも知れない。今も天神様の境内に安置されている大形梅花一輪を化石とも見せている神秘な置き石も木屋瀬天神河童一族の奉納になるものではないか、との推論も残っている。

ともあれ大川を控えている木屋瀬の人々が、子供達を水難より守らなければ、と思われた実にありがたき名作河童談義である。

本町　柴田由美子

白象をテーマにした夏休みイベントを開催

劇「星とあるいた白象」の初公演も



7月から8月にかけて夏休みイベントとして、江戸時代に長崎街道を歩いた白象をテーマに紙芝居、工作教室、たなばたまつり、白象探偵団（町並み散策）を実施し、市内外の多くの方々にご参加いただきました。イベント実施にあたり、ご協力をいただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

今年は、長崎街道筑前六宿開通400年の年にあたります。この記念すべき年に、木屋瀬宿を舞台とした新しい劇が生まれました。それは、劇団ショーマンシップによる劇「星とあるいた白象」です。8月5日のたなばたまつりで、劇「星とあるいた白象」の初公演が「こやのせ座」において行われました。

今後は、全国に向けて公演が行われていく予定です。

第47回企画展 ご来場ありがとうございました

平成24年9月2日(日)まで開催しておりました第47回企画展「白象くん街道を歩く～映像とエピソードでつづる白象物語～」は、江戸時代将軍吉宗の命により、長崎から江戸へ旅をした白象について、筑前六宿に関する資料を中心に展示いたしました。今年は、長崎街道筑前六宿開通四〇〇年記念の事業として、白象くんに関するイベントも開催し、企画展と併せて親子で楽しんでくださる姿が多くみられました。来場者は1524名とたくさんの方に来館していただきました。皆様のご来館誠にありがとうございました。（学芸員　髙田　佳奈）

あらすじ

1728年中国の貿易商が八代将軍・徳川吉宗に献上するため、象を連れてきた。長崎港に着いた象は74日間かけて江戸まで歩いたという史実を基にした物語。長崎から歩いて長崎街道筑前六宿の一つである木屋瀬宿に辿り着いた象。象を見たことが無い宿場の人々はその大きさと食事の量を聞かされ、皆、度肝を抜かれる。長崎から江戸に向かった白象の運命は???

木屋瀬宿安政六年『年中御用留』
《安政の三日コロリ》其の四

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

諸国神社仏閣拝礼の旅で、木屋瀬宿に入った肥前国嶋原は有家郡有田村在の甚左衛門娘そのが、高い熱と激しい吐瀉や瀉痢（下痢）でコレラらしき症状で、医師原田三省によって診察と施薬を受けたのが安政六年五月廿二日であった。『年中御用留』の記述には、「**甚左衛門娘そのと申す者、当月廿二日当村通りかかり、病気に付き候、当村医師原田三省に相頼み、薬用分抱等致し候……**」と記されている。

原田三省の名が、村役人が郡奉行所に届け出た『御注進申上ル事』の中に、女旅人そのなる者の施薬を行っている事が初めて書かれている。それ以来、数ヵ月後の八月末にかけて幾人かの木屋瀬宿に逗留中に発病した旅人や数十人に及ぶ木屋瀬界隈に住む罹患者に医師原田三省が関わっている。どの患者にも「**御施薬の丸薬一粒を両度ニ相用候処……**」と同じ字句が各人の症状に報告として連記されただけで、診療による各人の詳細な病状や丸薬の効能には、唯々「**手足共熱止清快仕候……**」だけである。これでは村役人の報告書なので詳細がわからない。勿論、患者に服用させた丸薬そのものが、福岡藩領内に御施薬として用いた『神虎丸』であることの確証がない次第である。

コレラ罹患者は御施薬の丸薬での効能は？

原田三省なる医師は、木屋瀬宿の村医者だけでなく黒田藩御抱え医師であって、福岡藩「万延分限帳」（万延年間の藩士の禄高・家格・氏名・住居等を記載）を調べると、本道医（内科）禄高三石で城代組（十四石扶持前後）で、三省とは通称名（正式の名でないが世間で普通に呼んでいる名）彼の父親も医師で通称名は三省であった。

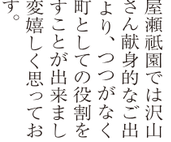
私は七月に、古文書勉強会の講師である国友千昭さんに、木屋瀬の山浦地区にある奥山墓地と新町の長徳寺にある原田三省の墓に連れて行ってもらった。奥山墓地の方は鬱蒼とした樹木の下に、三省の妻女清子が建立した墓があり、新町の長徳寺には、本堂の南側通路に面して幾つかの原田家の墓石が並べてあった。配置の現状から、ある時期に墓地を整理して一ヶ所に集めているようだった。

原田三省對鴎の墓誌を要約すると、文政二年（百九十三年前）に医師原田三省蕉蔭の子として出生、幼名喜代寿・少年時代は小倉藩川江節の塾亦医学を秋月藩江藤養泰に学び、天保八年家督を継ぎ、更に上京医学を深めた。医業益々盛え其医術ハ近在近郷に名声を博し、亦尤も能書家（書道を巧みに書く人）にて著名。性豪邁（気質が強く盛ん）壮年時各地ニ寄寓し、交友甚広し。明治十一年八月十五日享年六十才歿す。）因に付記すると、彼の父原田三省蕉蔭も医者で文人でもあった。文政元年三月に木屋瀬宿の豪商高崎家に頼山陽（日本外史著者）が九州漫遊の折に、逗留した同家で、歓談相尽して交遊を深めた事が木屋瀬町誌に記述されている。また、三省が医業を営んでいた場所は、現在の数住病院の裏にある駐車場付近であることが明治二十二年の「**町並み地図**」で確認できる。

さて、コレラ患者に原田三省が投薬した御施薬「丸薬」で、罹患者が「**……丸薬一粒両度相用候処清快仕申候…**」と、全てが快復したのでない。『年中御用留』の『**御注進申上ル事**』にも、「**……当村医師原田三省ニ相頼薬用等致呉候共養生不相叶十七日相果（死亡）申候……**」等々の記述が幾つもあった。

原田三省家墓地（長徳寺）

ご協力・ご支援ありがとうございました
木屋瀬祇園が無事終了



木屋瀬祇園では沢山の皆さん献身的なご出仕により、つつがなく当番町としての役割を果たすことが出来まして大変嬉しく思っております。

初日の集中豪雨、二日目の酷暑とどうなることかと心配いたしましたが、けがもなく無事に終えることが出来ました。

あの集中豪雨のあとは、何かスカッとした気分で祭りに取り組むことが出来ました。

青山、赤山、二基の手造り山笠が巡行し、走り、歴史と伝統を守りえたことは当番町の誇りであります。婦人部隊のご健闘にも感謝・感激です。

言葉では言い尽くせぬ感謝の思いに心をこめて関係各位にお送りしお礼のことばとします。（赤山　総取締　髙鍋誠一）

伝統ある木屋瀬祇園、新町七町、青山の当番町総取締役を受けまして、無事に役目を果たすことが出来るか心配しておりましたが、多くの皆様からのご尽力のお陰で事故もなく無事終えることが出来ましたことを深く感謝し、心からお礼申し上げます。一日目は大雨、二日目は「カンカン」照りの猛暑の中、皆さん大変だったでしょう。ご苦労かけました。

また、婦人部の皆様には、裏方として大役を献身的に果たしていただきましたことに深甚の敬意を表し厚くお礼申し上げます。当番町としていろいろと到らぬことがあったと思いますが、何卒ご容赦をお願い申し上げます。この祇園祭りが末永く盛大に執り行われることを祈念いたします。本当に有難うございました。

（青山　総取締　田中力）